

団塊世代の孫育てのススメ—イマドキの子育て事情とババママのサポートのコツ



- 石本まき子 著
- 中央法規出版
- 2012年初版
- 1,400円(税別)

ババの育児参加は「イクメン」ムーブメントでほぼ定着した感があるが、今度は「祖父」の孫育てが注目されている。晩婚晩産化もあってこれから孫を持つ人は団塊の世代が中心。しかし、この世代の男性はかつて日本を焼け野原から復興させ、経済大国にした企業戦士たち。「仕事が人生」「プロジェクトこそが男のロマン」と豪語して、家庭のことはすべて妻任せだった。定年になって、ようやく「さあこれから余生を楽しもう」と思った頃に、結婚した子ども世帯に赤ん坊(孫)が生まれ、そこで初めて寄る辺ない存在としての「子ども」に出会い、スイッチが入ってしまう人が多いのだ。

本書は初孫が生まれたジジ&ババのために、経済力や男女役割が変化し働きが普通化した時代の子育てに家族総出することの意義を伝授してくれる。単にオムツ交換などの技術を教えるノウハウ本ではなく、産後うつ、児童虐待、ひきこもりなど現代の子育てにおける難しい現状について詳細なデータをもとに説明し、考えさせ、「たからこそ祖

父母の出番」と勧める。祖父も母も入れた子育ては3世代ファミリーの絆の再構築に繋がり、高齢夫婦の間で増加する熟年離婚のリスクヘッジへの教えでもある。

イクジイ

「子育て・孫育てに祖父母の力を！」。母や祖母の育児は当たり前だった日本の情勢も変化し、次世代育成において父親(ババ)だけでなく祖父(ジイ)の協働が求められるようになった。それを理解し立ち上がった中高年男性を「イクジイ」と呼ぶ。定年は社会的リタイアではない。時間的、精神的、経済的余力を持つイクジイ世代こそ、次世代育成にも地域社会にも貢献できる。その旗振り役として、イクジイ世代の活動が広がり、自治体の地域支援や健康福祉の事業としても採用されている。2012年には当時の野田首相も「イクジイ宣言」をして話題になり、同年の流行語大賞ベスト50にもノミネートされた。

著者 安藤 哲也 (NPO法人ファザーリング・ジャパン代表)

LGBTQってなに? —セクシュアル・マイノリティのためのハンドブック



- ケリー ヒューゲル 著
上田豊子訳
- 勁草書房
- 2011年初版
- 2,000円(税別)

「自然は多様性を好むが、社会がこれを嫌う」という言葉がある。この世に存在するさまざまな特徴を持った者について、それが「ふつう」と異なる場合、人々はそれを「不自然だ」として排除しようとする。時代や社会によっては犯罪化され、あるいは修正・矯正(治療)の対象とされてきた。性的マイノリティ(少数者)は、社会的スティグマ(汚名・烙印)や差別・偏見にさらされやすく、その事実も、さまざまな調査結果が示す「いじめ」の経験率、不登校率、自殺関連の経験率の高さという形で輪郭づけられる。当事者の抱える「生きづらさ」は、常に社会との接合面で引き起こるのである。

本書は、そうした性的マイノリティの若者が日常生活で直面する問題や疑問を解説したハンドブックである。彼らを取り巻く社会通念の誤りを払拭し、「あなたの存在は、そのまま十分すぎるくらい」と語りかける。思春期・青年期は精神的に不安定な時期で、幼児期や老年期とともに「人生の三大危機」といわれる。日本の事情と若干異なる記述もあ

るが、若者が自身の価値と勇気を感じるのに支障をきたすほどではない。巻末には用語集などもあり、保護者や教育関係者が理解を深めるのにも役立つ好書である。

LGBTQ

L(レズビアン)、G(ゲイ)、B(バイセクシュアル)、T(トランスジェンダー)、Q(クエスチョニング=迷っている人)の語文字をつなげたのがLGBTQである。日本では「性的マイノリティ(少数者)」という用語がより一般的だが、単に「多数者のありようとは異なる者」というだけでは小児愛恋者などもこれに含まれることになる。「誰」の語を添えているのかを明確にし、さらには他者(社会)からみた分類・名付けではない主体的な表現として、英語圏ではLGBTQという用語が使用される頻度が高まっている。なお本書ではGLBTQが使用されている。

訳者 東 橋子 (大阪公立大学保健福祉学域教育福祉学類教授)

福祉社会の行方とジェンダー



- 石本まき子 著
- 勁草書房
- 2012年初版
- 3,000円(税別)

社会福祉、福祉社会、福祉国家の課題をフェミニズムの視点で探求してきた著者の近年の論考集である。21世紀に入り、生活困窮リスクの高まりや格差拡大は日本の男女の共通課題となった。しかし、このことは女性の抱える困難が増えたということではない。むしろ政策動向や社会状況の変化のなかで女性の困難はより一層増していると著者は喝破する。介護保険制度の導入に伴う「女性が引出す安上がり労働」の広がり、家族の多様化のなかで少子化対策に集約される男女共同参画政策が家族、とりわけ母子世帯へ及ぼす不利益への関心の低さ、性的商品化の広がりに対して取られるべき女性の権利の保護の観点からの社会福祉の遅れを指摘し、福祉社会をジェンダーの視点で分析することが今こそ必要だとする著者の主張を実証している。

他方で、2000年以降は男女共同参画の取組みへのバックラッシュが全国で展開されるなど、男女平等に軸足を置いて女性の問題を取り上げること自体、難しくなっている。本書は、そうした社会状況にも注意を払い、改めてフェミニズム運動と女性学の源流に立ち返り、福祉社会の形成におけるフェミ

ニズムの思想的価値と意義を示している。そのエッセンスが書き込まれた第1章と第6章は必読である。また、映画・文芸評論のコラム欄が適宜配置され、身近なところにジェンダー問題を考える題材が豊富に在ることに気づかせてくれる。著者自身も取り組んできた運動としてのフェミニズムと学問としての女性学の成果が実感できる。

福祉社会

国家、家族、市場、NPOなど多様な部門が複合的に責任と役割を担うことで一定の福祉が実現される社会をいう。個人や家族がどの程度どのような福祉を享受できるかは、国家の果たす役割と性別分業の程度に大きく左右される。このことは種々の国際比較研究や類型論が明らかにしている。1980年、日本政府が目指した福祉社会とは、福祉とケアの基盤を国家ではなく企業と家族(実家は女性)に置く社会であった。現在は介護保険制度により家族以外の部門もケアの受け皿となっているが、その労働の多くを女性が担い、有償であっても不安定労働となっている。

著者 石川 美絵 (国立政策研究大学院大学 福祉サービス研究センター研究員)

3・11 女たちが走った — 女性からはじまる復興への道



- 日本DPW連合会 編
- ドメス出版
- 2012年初版
- 1,800円(税別)

2011年3月11日の東日本大震災時、このとき、さまざまな場所、女たちが走った—被災者のために何かしなければと飛び出す人、支援する人、連絡を取る人、見まわす人、励ます人。この行動の記録が本書にはぎゅぎゅ詰まっておき、女たちのエンパワーメントの過程を読み取ることができる。

行動を起こすなかで錯綜する「生きながらえてしまった苦痛」「あの日、心の時計が止まってしまった」「これからどうなるのだろう?」「どこか生き残った人は生きねば!」といった複雑な心境も書き留められている。読者はそれらの声聞き、想像力によって被災地の状況を理解することができる。

さらに、BPW(Business & Professional Women)連合会をはじめ、さまざまな支援団体が活動するなかで、それぞれの立場の女たちが「私には何ができるのか?」「私は何をすべきなのか」を模索してきた状況も記録されている。「せっかく、助かった命をこれ以上失うことはできません」「諦めてしまったらそこで終わってしまう」という強い信念と、「誰かがそばに付いているよ」と感じられる環境が必要!という配慮が、女性たちの言葉の根柢から伝わってくる。

男女共同参画の観点からの問題点も記録されている。各地の避難所で生活する人々の半数が女性であるにもかかわらず、管理者のほとんどが男性で、女性たちの人

権や女性のニーズについての理解や配慮が不十分であったことも記録されている。

震災などの非常時には「想像」「信念」「配慮」「理解」止った目に見えないものが重要になる。これらは人間の意識や認識にかかかっており、エンパワーメントの過程では欠かせない。相手の気持ちやニーズを想像し理解できなければ、何をすべきか、何を配慮すべきかわからない。さらには、信念がなければ行動は起こせない。

本書に記録された女性たちの鋭い観察眼とエネルギーな行動力は、平時には認識できなかったさまざまな問題にしっかりと目を向ける勇気と、これからという視点を持って、何をすべきかを問い直すきっかけを読者に提供してくれる。

エンパワーメント

自己の置かれた状況を認識し、他者とのかかわりのなかで、課題を発見し解決していく力をつけていくこと。女性が個人的に力をつけるだけでなく、社会変革の担い手として連携して力をつけていくという意味合いも持つ。

著者 長己 佳寿子 (山口大学エクステンションセンター准教授)

